

『東方』三〇九号より

楽音に渦巻く「歴史」のドラマ

坂井 洋史（二橋大学）

▼ 『東方』309号より
一 楽音に渦巻く「歴史」のドラマ
▲ 坂井 洋史

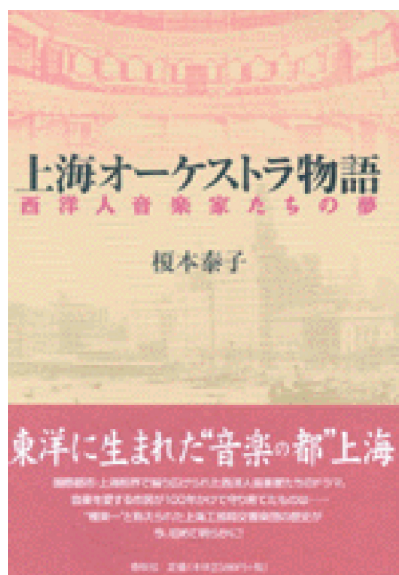
巴金の次兄に関する回想「我的哥哥李堯林」〔『随想録』第四集『病中集』所収〕に、「私たちは週に三、四回は映画館に行き、工部局楽隊の日曜演奏会も一度たりと聴き逃さなかった」という一節がある。燕京大学を優秀な成績で卒業した後、天津の南開中学で長く英語教師を務めた李堯林は、当時の似たような経歴の知識人同様、文化生活においてはハイカラな西洋好みだったのではないか。その彼が欠かさず聴きに通うほどの「工部局楽隊の日曜演奏会」とは、定めし本格的なものだったろうと、かねてよりおぼろげに想像してはきたものの、さて、その實際を調べようにも、取っかかりの見当すらつかねる私は、篤実な調査と豊富な文献資料に裏打ちされた本書によって、それがどのようなものだったのか、ようやく知ることができたのであった。

李堯林が天津を離れて上海に来たのは一九三九年九月のこと。翌年七月までの十カ月間、桂林から「孤島」と化した上海に舞い戻り、『激流』三部作掉尾の『秋』を執筆し始めた弟、巴金と同居している。本書では第五章末尾近くに描かれる年代、すなわち、ヨーロッパで第二次世界大戦が始まり、共同租界の将来に影を落とし始めた頃のことである。本書第五章第三節の記述に拠れば、一九三〇年代以降、工部局交響楽団（巴金という工部局「楽隊」のことだろう）の聴衆は、娯楽の多様化のあおりで減少し続け、そもそも租界の税収により運営されていた楽団は何度も存続の危機に立たされたという。しかし、音楽そのものについてはど

トップページにもどる

榎本泰子著

『上海オーケストラ物語——西洋音楽家たちの夢』
四六判・二九八頁・春秋社・二、六二五円



うだろう。本書に窺う限り、一九一八年に指揮者に就任したマリオ・パーチの二十年に及ぶ牽引、ロシア革命後に流入してきた、正規の音楽教育を受けた白系ロシア人団員の吸収などにより、恐らく音楽的には最も高い水準を誇った時期だったようである。その集大成が、一九四〇年五月、チャイコフスキー生誕百周年を記念して開かれた連続演奏会だった（二〇一〜四頁に詳しい）。李堯林は「李林」の名前で、ゴンチャロフ、クープリン、アルツィバースィエフなど、ロシア作家の作品を翻訳しているし、かたや弟の方のロシア文学への傾倒はいうまでもない。兄弟は胸躍らせこのチャイコフスキー特集に赴いたことであろう。当時の楽団のホームグラウンドが、彼らの住いからごく近いライシャムシアター（蘭心大戲院）であることも、本書に教えられたのであった。

巴金は四〇年夏に上海を離れ、李堯林は独り上海に残る。

本書のエピローグにあるように、工部局交響楽団の歴史は一九四二年に幕を引き、その後は日本の管理、運営下、「上海交響楽団」として活動を継続する。没落した大家族を養うため、清貧に甘んじながら、生涯独身を通した李堯林の寂しい晩年（抗戦勝利直後に死去）を、上海交響楽団の音楽は些かでも慰めてくれたものだろうか。

このような、巴金兄弟を巡る私のささやかな穿鑿趣味を満足させてくれた功德の顕彰を以て、本書への評に代えるわけにもいくまいが、そもそも本書は、上海共同租界というステージに去来した音楽家群像に光を当てた、著者の「人間」への興味を際立たせる筆法を採り、それは読者の興味を繋ぎとめる可読性の強化という点で成功している。だからこそ私にも李堯林のような聴衆の存在がすぐと連想されたのであった。そのことと裏腹を成す特徴として、当時演奏され、聴かれていた「音」がどのようなものであったか、行間に実際の楽音の痕跡なりと聴き取ろうとしても著者がその方面にさして意を払っていないことは確かである。もともと、著者もプロローグで述べているように、「音楽は石造りの建築と異なり、形として残ることがない。上海のヨーロッパ人たちが聴いていた音楽は、百年後の私たちにそのまま届くことはない」のである。そのような「音」のはかなさを捉えて、エリック・ドルフィーが「だからこそ音楽は美しい」と『ラスト・デート』音源の最後に肉声で語ったのは、一回性というインプロヴィゼーションの本質を語ったものと普通は理解されるが、しかし、音楽を音楽以外の何ものでか表象することの不可能性を見切った上で、そのような楽音など生まれる端から虚空に飛散させておけばよいという、それとして天晴れな態度を明かしたものであったろう。道頓堀を「犬の様にうろついていた」

トップページにもどる

小林秀雄の頭の中で突然鳴ったモーツァルトの四十番第四楽章が、楽音としてどのような響きであったか、テーマ三小節目の四分音符と八分音符の間に、どのようなコントラストがつけられたか、『モーツァルト』一書は決して伝えないのである。本書をひもとく読者としては、小林も親しんでいたらしいトスカニーニ（パーチは指導を受けたことがある。一一五頁）やワルター、コルトーやハイフェッツ（彼らは上海公演を行っている）の、今日の基準からすると、些か時代がかって大仰に聴こえる、しかしヴィルトゥオーゾの手並みともいふべき華やかな演奏が、当時の上海の「虚空」を揺曳していたと想像を逞しくすればよいまでのこと、その言語による細かげな（そして怪しげな）「再現」を求めても詮なきことである。

本書は全七章仕立てで、プロローグ「世紀を流れる河」、第一章「上海に生まれた『西洋』」、第二章「パブリックバンドの誕生」、第三章「ドイツ音楽家の運命」、第四章「名指揮者の登場」、第五章「多国籍都市のシンフォニー」、およびエピローグ「日本人と『上海交響楽団』」の各章から成る。第一章、第二章は租界に住み着いた西洋人が、本国同様の娯楽を求め、アマチュアを中心に演劇や音楽会などが催された時代から、租界住民への公益還元を目的に共同租界工部局が経営するパブリックバンドが結成され、次第に形を整えていくまでの、いわばオーケストラ前史が、租界成立の歴史、楽団を率いたレミューザ、ヴェラといった西洋人音楽家のプロフィールとともに描かれる。初期のパブリックバンドを支えたのがフィリピン人であったという事実は（二九〇三〇頁など）、七、八十年代の日本のパブやディスコにどれほどのフィリピンバンドが出稼ぎに来ていたかを思い起こすと興味深い。第三章は、前半三節でドイツ人

ブックによるバンドの職業楽団としての整備を記し、後半二節において、第一次世界大戦に翻弄されたドイツ音楽家の運命を描く。特に、青島防衛戦で捕虜となり、日本に抑留された音楽家たちが、日本に本格的な西洋音楽をもたらした功績の紹介に紙幅を割いている。日本における西洋音楽というテーマをも視野に収め、アジアにおける西洋文化受容の多様性を示すことで、上海租界史を点綴する異文化移入のエピソードをクロノロジカルに羅列する態の、平板な叙述を脱して、全書に立体感を増しているといえよう。第三章以降、指揮者(むしろ音楽監督というべきか)自身による工部局宛の年次報告が多く引用されるようになり、ここに楽団は俄然生々しく息遣いを始めるようである。職業楽団として洗練されるほどに、楽団を取り巻く煩瑣な事柄もいや増すはずで、パーチという、確かに優秀であつたろう音楽家に焦点を据えつつ、共同租界に依附する多国籍集団であるがゆえに、国際情勢や戦争に翻弄されざるを得ない楽団の運命や、困難な運営状況についても丁寧に目を配っている第四章、第五章が、本書で最も精彩に溢れる部分であるよう、私には読まれた。巻末には一般読者向けというには余りに詳細な注釈と、これは不可欠であろう年譜そして著者がまだまだ豊富に「タネ」を持っているらしいことを暗示する長めのあとがき(本書に十分書き込んでくれたらという憾みを遺さぬでもない)が附されている。

今年はシヨスタコーヴィチ生誕百周年に当たり、これを記念した連続コンサートの第二回目が、上海交響楽団の二〇〇六〜〇七年シーズンの開幕コンサートだった。本書を半ばまで読んで会場に臨んだ私の目は、ステージ背景の、アーチを支える円柱の間から青空が覗いている書割に先ず惹きつけられた。この意匠、パブリックバンドとして、屋

▶ トップページにもどる

外で租界住民に娯楽を提供した楽団の歴史を踏まえてのものであるなら、なかなか穿っているではないか。この書割を背に、今やほとんど全てが中国人メンバーの上海交響楽団が、決して達者とはいえぬながら、しかし、いかにも生真面目にシヨスタコーヴィチの九番を奏でるのを、つい数日前に大連のタクシー運転手がスターリンを「ファシスト」呼ばわりしていた(！) ことなど思い出しながら聴いていると、団員が危うく落下しそうになる旧南京大戲院の狭いステージ上に渦巻いているのは、楽音というより「歴史」の混沌そのもののようで、しばし目眩めく思いすらしたのであった。著者が見つめているのも、またそのような「歴史」の混沌に違いない。しかし、本書が描いたのは、そのような「歴史」の前半までである。本書で「混沌」に分け入る根拠と才気を十分に披露した著者には、ぜひとも今につながる「後半」まで筆を伸ばしてもらいたいものと思う。